

文芸欄



俳句

紅梅会 (東灘区)

餅花や古尾の染に溶け込みぬ
菊の香や三本仕立玄関へ
満月の真澄鏡を宝樹とし
書初め一字一句に心こめ
書初めや部屋を包みし墨香る
格式を引き継ぎ守る餅花よ
餅花の季を心にし待ちわびて
餅花の影濃く淡く壁に揺れ

梅苑句会 (東灘区)

処暑の空孤なす白球風誘ふ
耐へつつも弱音はく日もある猛暑
いちじくの熟れたる枝に風の吹く
白き花と見まごうばかり鱧料理

宝愛句らぶ (中央区)

呼応して鳴く蝸のせつなざよ
厄災を弾け飛ばして花火かな
パナ帽出掛ける姿父想ふ
原爆忌水一杯の有難く

気がつけば蝉の鳴き声過ぎ去りし
夏帽子母を女性と見しあの日
エアコンの手下となりぬ扇風機
日もすがら日本列島蝉時雨

花山短歌会 (北区)

めつきりと回数減りし回覧板上下正しく印鑑を捺して
少し前空き家となりし庭に咲く花多く雑草に埋れし哀れなり
良く見れば葉の青々と山ももの光あふるる大樹はそよぐ
この着物を如何なる服に仕立てるかファッションショウは九月の半ば
救急車呼んでと友の電話あり焦るな焦るな我なり
我が影をうかべて流るる紀の川の中州に一羽白き鷺見ゆ

梅の美会 (兵庫区)

日の昇る待ちて朝顔鮮やかに
色男八十路半ばや風寂し
炎天に遺品積む人皆無口
生かされて三食味わう秋の膳
名月を話し相手に酒ちびり
畦道や等間隔に曼珠沙華

青葉クラブ (北区)

灯を消せば虫の音聞こゆ籠枕
年ごとに秋の趣身に染みぬ
歳時記をめぐる指先そぞろ寒
高原ときわ会 (北区)
白露草ひとときの涼貫いけり
石舞台群れて離れて秋茜
窓越しに無念無想の秋季かな
疫病の去りて清々秋まつり

ひまわり句会 (北区)

輪投げする窓に初秋の風入れて
ひぐらしや木蔭で休む川掃除
ひよどり台句会 (北区)
あらしすぎ明石海峡秋夕焼け
阿波おどり赤い蹴出しと下駄が舞ふ
伝えねばポツポツ語る終戦忌
炎天の一步に萎える心かな

北斗句会 (北区)

大戦と大患くぐりし生身魂
原付の僧は路地抜け盂蘭盆会
湧き水の豊かな街の新豆腐
誰来しや酒と煙草の墓前かな
ステーキに舌鼓打つ生身魂

古林 保子

磯元カヨ子
船崎めり子
山田加壽代
清水 恵子
木下いく子

◆個人

野分去る朝の小径に白萩の小枝裂け落つ花の哀しみ
どくだみも摘み・干し・焙じて茶葉となりサロンの冷茶皆で楽しむ(兵)
ほほえみて我をみつむる幼子に平和な時間が永遠に続けよ(北)
祇園さん予約出来たとさそいあり三年ぶりの友の声はつむ(北)
朝まだきバイクの音の近づいていつも通りに届く朝刊(須)
糠床の機嫌はよろし茄子胡瓜色よく漬かり今朝の食卓に(西)

◆個人

故郷に父母亡くて盆の月
大戦をくぐりて寡黙生身魂
生身魂父には灘の生一本
口げんか仲直りして心太
多間台ときわ会文芸部 (垂水区)
山粧う思うは我が家我が故郷
恥じらいてほんのり紅き新生姜
山粧う旅の仕度をやり始め
山粧うシャッター通りの街静か
おろしソバ香と味深し生姜すり

きらく句会 (西区)

霧晴れて口笛ひとつ吹いてみる
夏日浴び川底光る石一つ
この猛暑ゴーヤのカーテン枯れもせず
法師蝉鳴くや余命を知る夕べ
ラムネ瓶振れば昭和の子に戻り
突然の豪雨落雷破れ傘

◆個人

落ち葉踏む音に季節の便り聞く(東)
夫の手や丙の胡瓜を高々と(灘)
窓開くる大樹に日毎蝉しぐれ(灘)
千眼に残りし摩耶の紅葉山(灘)
山眠る寂けき明かり山家の灯(北)
松手入れ鯉のはねたる波紋かな(北)
睡蓮や悲話を秘めたる地に咲く(須)
風鈴や思い出多き母の癖(須)
若人の頂目指す甲子園(垂)
のぞき見る小窓に高しのこり月(垂)
山荘に賑わい消えて枯木立(垂)
梅雨明けかセミの鳴き声耳おおう(西)
窓辺打つ寝ぼける蝉や終い風呂(西)
桜木に居る居る居る居る熊ゼミが(西)

岸下 庄二

北田 建樹
都倉 知子
福井 悦子
山上 幸子
竹村 良子
山田キミ子
高橋 純子
福本 和恵
田畑美恵子
藤田 恵子
山田としゑ
芝田 律子
寺岡 洋子
濱頭ミノル

◆個人

故郷に父母亡くて盆の月
大戦をくぐりて寡黙生身魂
生身魂父には灘の生一本
口げんか仲直りして心太
多間台ときわ会文芸部 (垂水区)
山粧う思うは我が家我が故郷
恥じらいてほんのり紅き新生姜
山粧う旅の仕度をやり始め
山粧うシャッター通りの街静か
おろしソバ香と味深し生姜すり

きらく句会 (西区)

霧晴れて口笛ひとつ吹いてみる
夏日浴び川底光る石一つ
この猛暑ゴーヤのカーテン枯れもせず
法師蝉鳴くや余命を知る夕べ
ラムネ瓶振れば昭和の子に戻り
突然の豪雨落雷破れ傘

◆個人

落ち葉踏む音に季節の便り聞く(東)
夫の手や丙の胡瓜を高々と(灘)
窓開くる大樹に日毎蝉しぐれ(灘)
千眼に残りし摩耶の紅葉山(灘)
山眠る寂けき明かり山家の灯(北)
松手入れ鯉のはねたる波紋かな(北)
睡蓮や悲話を秘めたる地に咲く(須)
風鈴や思い出多き母の癖(須)
若人の頂目指す甲子園(垂)
のぞき見る小窓に高しのこり月(垂)
山荘に賑わい消えて枯木立(垂)
梅雨明けかセミの鳴き声耳おおう(西)
窓辺打つ寝ぼける蝉や終い風呂(西)
桜木に居る居る居る居る熊ゼミが(西)

岸下 庄二

秋山 弘之
脇坂有多子
藤井久美子
中村佳代子
久下 順司
山本雄二郎
樋山 隆夫
木村 敏博
尾上 正紀
喜田 弘征
阪本 道子
田野 育利
森本 珠実
大橋 治子

◆個人

故郷に父母亡くて盆の月
大戦をくぐりて寡黙生身魂
生身魂父には灘の生一本
口げんか仲直りして心太
多間台ときわ会文芸部 (垂水区)
山粧う思うは我が家我が故郷
恥じらいてほんのり紅き新生姜
山粧う旅の仕度をやり始め
山粧うシャッター通りの街静か
おろしソバ香と味深し生姜すり

きらく句会 (西区)

霧晴れて口笛ひとつ吹いてみる
夏日浴び川底光る石一つ
この猛暑ゴーヤのカーテン枯れもせず
法師蝉鳴くや余命を知る夕べ
ラムネ瓶振れば昭和の子に戻り
突然の豪雨落雷破れ傘

◆個人

落ち葉踏む音に季節の便り聞く(東)
夫の手や丙の胡瓜を高々と(灘)
窓開くる大樹に日毎蝉しぐれ(灘)
千眼に残りし摩耶の紅葉山(灘)
山眠る寂けき明かり山家の灯(北)
松手入れ鯉のはねたる波紋かな(北)
睡蓮や悲話を秘めたる地に咲く(須)
風鈴や思い出多き母の癖(須)
若人の頂目指す甲子園(垂)
のぞき見る小窓に高しのこり月(垂)
山荘に賑わい消えて枯木立(垂)
梅雨明けかセミの鳴き声耳おおう(西)
窓辺打つ寝ぼける蝉や終い風呂(西)
桜木に居る居る居る居る熊ゼミが(西)

川柳

桂木ひふみ会 (北区)
ちよっと待て真顔気になる生返事
生返事キャッチボールの古い二人
はいはいと頼まれたことすぐ忘れ
「元気ですか」「まあまあでん」浪速っ子
オーイハイイこだまひびく二人連れ

筑栄会 (北区)

孫来たる財布は休めぬ夏休み
定年で毎日毎夜夏休み
夏休み枕並べて昼寝する
スナックの五〇周年ママいくつ
温暖化大雨地域北へ行く
置き場所を変えて忘れて大騒ぎ

桃山台クラブ文芸部 (垂水区)

桃山台クラブ文芸部 (垂水区)
十七年夢でも会えぬ娘となりぬ
時過ぎて令和の世にも馴む日々

◆個人

届きたる故郷の香りなつかしき(東)
病院はマスク美人が花盛り(東)
母慕い老犬張つぱり墓まいり(灘)
悔いはない吾は貧しく孫外遊(北)
区老連仕事多い苦楽連(北)
健康で長生きし過ぎて保険切れ(北)
黄昏に雷遠く雨を待つ(西)

◆なぶり

なせばなる家事手伝をやったのけ
デーサービスは体調悪い(北)



荒木 宗Q

京念久美子
笹岡 淑子
大和ケント
あきら
よし
まり子
かほう
三 茶
まさこ

◆個人

届きたる故郷の香りなつかしき(東)
病院はマスク美人が花盛り(東)
母慕い老犬張つぱり墓まいり(灘)
悔いはない吾は貧しく孫外遊(北)
区老連仕事多い苦楽連(北)
健康で長生きし過ぎて保険切れ(北)
黄昏に雷遠く雨を待つ(西)

◆なぶり

なせばなる家事手伝をやったのけ
デーサービスは体調悪い(北)